

【研究ノート】

カルシッコの風習 —フィンランドの樹木と共に生きる世界—

田中 佑実

要 旨：フィンランドには樹木に印をつける風習がある。カルシッコと呼ばれるこの印は樹木の枝や最上部を切り落としたり、樹木の幹に数字やイニシャルを刻むことで作られる。カルシッコには、何事かを記念したり、目印をつけたりと、様々な目的がある。なかでも人々の誕生や結婚、死など人生の節目となる出来事を記念するために作られることが多かった。本稿では、カルシッコの風習を概観することで、フィンランドにおける人間と樹木との関係を分析する。特に樹木と人間が共に生きてきた在り様を色濃く残す、死者のカルシッコ (vainajan karsikko) に注目する。現在のフィンランドにおいて、死者のカルシッコは終わった風習、または終わりつつある風習だとみなされている。また、印がつけられた樹木も古くなり朽ち果てようとしている。社会の近代化が進む中で、こうした古くなってしまった風習から人々は離れ、その風習が実際にあったことを示す木々は道の傍らに取り残されてしまっている。フィンランドの人々は死者のカルシッコを、死者を思い出すものであると同時に、近代以前フィンランドにあったであろう伝統的な価値観や自然観と自分たちが疎遠になっていく様を示すものと考えているようだ。本稿では、死者のカルシッコの樹木を持つ家族のもとのフィールドワークで得た資料を紹介する。そして、「人間は自然に働きかける主体であり、自然は人間に働きかけられる客体である」という近代以降疑問視されることのなかった前提とフィールドでの情報を比較し、ヴィヴェイロス・デ・カストロの多自然主義を参照することで上記資料を分析する。その分析を通して、樹木が死者のカルシッコの風習において、人々の行動や思考に主体的に働きかけていることを指摘し、本研究と「自然と文化」を巡る人類学的議論との繋がりを示す。

キーワード：「自然と文化」、存在論的転回、多自然主義、樹木、カルシッコ

1. はじめに

フィンランドには樹木に印をつける風習がある。カルシッコと呼ばれるこの印は樹木の枝や樹木の最上部を切り落としたり、樹木の幹に数字やイニシャルを刻んだりすることで作られる。本来カルシッコは、フィンランド語で「木の枝を切り落とす」という動詞 (karsia) に由来していることから、枝を切り落とされた樹木のことを指している (Vilkuna 1992:16)。カルシッコには、何事かを記念したり、目印をつけたりと、様々な目的がある。なかでも人々の誕生や結婚、死など、人生の節目となる出来事を記念するために作られることが多かった。本稿では、カルシッコの風習、特に死者のカルシッコ¹を概観することで、フィンランドにおける人間と樹木との関係を分析する。

本稿で取り上げる死者のカルシッコは、キリスト教がフィンランドに入ってくる以前の土着の民間信仰とキリスト教の教えが融合して出来たものであると考えられている。現在のフィンランドではこの風習を知っている人は少なく、民俗学者の Janne Vilkuna (1992, 1993) は終わった風習、または終わりつつある風習として記している。その理由には 19 世紀半ばの産業の発展や地方の人口変化、土地の再配分が挙げられている。すなわち、近代化に伴う形で風習の形も変わり、衰退の一途を辿っているというのである。カルシッコは今、一つの節目を迎える時期にある。

これまでの研究では、死者のカルシッコの起源や分布、機能の変化について考察がなされてきた (Krohn 1898 ; Vilkkuna 1992, 1993 ; Sarmela 2009)。しかし、この風習は人々の生活の文脈の中から切り出して検討されることが多く、風習の担い手である人々の生活の中で、風習がどのような意味を持つかという部分について検討されることは少なかった。また、この終わりつつある風習をどのように受け止めているのかという部分は言及されてこなかった。その理由として、カルシッコの風習が人々の生活や社会の流れの中で捉えられてこなかったことが挙げられる。カルシッコの風習の基盤にある人々の生活には常に変化が生じている。人々の生活との関係の中でカルシッコの風習を眺めることで、人間と樹木の繋がりをより幅広く捉える必要がある。

本稿では、死者のカルシッコの風習を今日においても実践している人たちとのインタビューから得られた情報を紹介し、そこに見られる樹木および自然と人間の関係を分析することを目的とする。これらの情報を分析する上で、「人間は自然に働きかける主体であり、自然は人間に働きかけられる客体である」という近代以降疑問視されることのなかった前提とフィールドワークで得た情報を比較し、ヴィヴェイロス・デ・カストロが『食人の形而上学』(2015)で提唱した多自然主義を参照して上記資料を分析する。

本稿の構成として、第2章ではフィンランドにおける宗教史を素描し、死者のカルシッコの風習を理解するための背景となる情報を提示する。第3章では、これまでのカルシッコの研究を参照し、カルシッコの歴史、なかでも死者のカルシッコの起源とその機能の変遷について述べる。第4章と5章では、死者のカルシッコを通して、人々が何を感じ、樹木とどのような関係を結んできたか、そして風習の終わりをどのように受け止めていくかといった、人々の想いの一事例を、死者のカルシッコの風習を続けている一家族のもとで行ったフィールドワークをもとに記述する。第6章では、フィールドでの事例が、近年の存在論的転回と呼ばれる思潮を通してどのように分析できるかを提示する。

2. フィンランドにおける宗教的世界観の推移

本章では、キリスト教が入ってくる以前にフィンランドに根づいていたとされる信仰とローマ・カトリック教会、ギリシア正教会、後にプロテスタントのルーテル派教会が入ってくるまでの宗教的世界観の推移を示す。民俗学者の Matti Sarmela は著書 “Finnish Folklore Atlas” (2009) において、フィンランドの紀元前から地場産業が始まる 1850 年までの文化を大まかに 3 つに分け、それぞれの時代の文化形態や信仰について記している。紀元前 7000 年から紀元前 1000 年を狩猟文化、紀元前 1000 年から 1000 年を焼き畑文化、1000 年から 1850 年を農民文化としている。

狩猟文化における基本的な信仰は自然のサイクルと結びついており、熊狩りやその他の狩猟の際には再生の儀式が行われていた。また、自然の土地には、その土地のハルティア (haltia) がおり、動物もそれぞれハルティアを持っていると考えられていた。ハルティアは超自然的な存在で、そのものの本来の住人であり主人である (Sarmela 2009:29)。狩猟が上手くいくかどうかはハルティアによって決められるとされていた。狩猟文化において、鍵を握るのはシャーマンであり、人間と動物の魂を操る能力によって狩猟と強く結びついていた。

焼き畑文化では、狩猟文化の信仰形態を残しつつも、祖先崇拝と魔術が人々の信仰の基

盤にあった。死者は住居近くのヒーシ (hiisi) と呼ばれる聖なる茂みに埋められるか、開拓地の真ん中の石の多い場所に埋められていた (Sarmela 2009:38)。土地や森、川や湖から得たすべての収穫物は、まず祖先に捧げられた。また、魔術とそれを扱う魔術師も焼き畑文化時代の信仰を形成していた。魔術師はものや自然物に宿る力を操り魔術をおこない、焼き畑の経済を安定させ、豊作に導く役割を担っていたとされている (Sarmela 2009:39)。

この後、農民文化に時代は移り、西からローマ・カトリック教会、東からはギリシア正教会がしだいに入ってくる。12世紀、13世紀にはフィンランドがスウェーデンの一部であったため、ローマ・カトリック教会の教えがより広まっていた。焼き畑文化の信仰基盤であった祖先崇拜と魔術はローマ・カトリック教会とギリシア正教会のどちらにとっても排除すべき観念であった。ローマ・カトリック教会とギリシア正教会は、自分たちの教会を異教の聖なる場所に建て、土着の民間信仰や宗教儀式をキリスト教の教えに変換しようとしていた (Sarmela 2009:49)。

16世紀には、宗教改革の波がスウェーデンを通してフィンランドにも押し寄せた。ローマ・カトリック教会に代わってルーテル派教会が広まり、組織的な性格によって、人々の生活に関与し、その宗教文化を強めていった。聖職者たちは異教に関わる樹木や石、聖なる場所を破壊し、異教の祭りや儀式、祖先崇拜を非難した (Sarmela 2009:50)。一方、フィンランド東部カレリア地方のギリシア正教会はルーテル派教会と比べ、異教に対して寛容で、祖先崇拜など多くの民間信仰をその伝統の中に吸収したと言われている (Sarmela 2009:51)。フィンランドにローマ・カトリック教会、そして特に宗教改革を経てルーテル派教会が入ってきたとき、死者は死後、死者のコミュニティに行くという民間信仰の観念は否定され、墓場に留まり、最後の審判を待つという教えが広められた。ローマ・カトリック教会とルーテル派教会は、死者をヒーシと呼ばれる聖なる茂みなどに埋葬するのではなく、より遠く離れた教会の墓地に埋めるように命じた。キリスト教の教えと、それ以前に考えられていた死者に関する信仰の観念の矛盾に対し、人々は警戒した (Vilkuna 1993:149)。Vilkuna (1992,1993) は、この矛盾によって死者のカルシッコが作られたと推測している。

3. カルシッコ/死者のカルシッコ

3-1. カルシッコ

カルシッコは、結婚や、たくさんの収穫をしたとき、初めて都市または市場への旅に出るといった重要な出来事の記念として、樹木の枝や、ときに樹木の最上部が切り落とされることで作られた。カルシッコの木や切り落とされた枝は人生の幸運を促す役割があったと言われている (Vuorela 1979:144)。

カルシッコには様々な種類があり、その形態も多様である。収穫のカルシッコ (saaliskarsikko) は漁業、狩猟、または真珠の収穫のために作られるカルシッコで、フィンランド東部と北部において、季節ごとに狩猟や漁業を行ってきた場所に作られていたものである。収穫のカルシッコは鮭が上ってくる急流の岸辺や魚がよく網にかかる場所、または鳥が求愛行為を行う森やシカ狩りに適した場所、頻繁に真珠が見つかる場所の近くに作られた (Sarmela 2009:134)。都市への旅の際、初めて都市に行く人のためにカルシッコ (ensikertalaisen karsikko) が作られることもあった。このカルシッコが作られた人は旅の

仲間として認められたと言われている (Sarmela 2009:135, Vuorela 1979:145)。結婚の際、新婦の家に印として結婚のカルシッコ (morsiamen karsikko) が作られた。結婚のカルシッコには広葉樹よりもモミが選ばれ、枝を切り落とし、最上部のみが残された。幹には布や紙で縞模様の飾り付けが施されるか、苔で編まれた花輪がかけられた (Sarmela 2009:206)。名前の日のカルシッコ (nimipäiväkarsikko) はカレンダーにあてはめられた個人の名前の日を祝して作られたものである。名前の日のカルシッコには若いモミが選ばれ、最上部を残して枝を切り落とし、森から切り出して家の庭に立てた。フィンランド南西部では、名前の日のカルシッコにも結婚のカルシッコと同じように飾りが施されたといわれている (Sarmela 2009:296)。

本稿で注目する死者のカルシッコ (vainajan karsikko) は、フィンランド東部、特にサボ地方において確認されている。民俗学者の Toivo Vuorela が記した“Kansanperinteen sanakirja” (1979) によると、死者のカルシッコは死者を墓に運ぶ際に針葉樹を選び、道沿いの枝をいくつか切りとるか、樹木の最上部を切りとっていたとされる。かつて、森林地帯に住む人々は節目ごとにあの世とこの世のヴァキ (väki) にメッセージを残す必要があった (Vilkuna 1992:17)。ヴァキはフィンランド語で人を指す言葉であるが、霊的なパワーに対しても用いられる。森などの自然物や動物に加え、墓やその他の宗教的な場所といった強い感情を沸き立たせる人工的な場所にもヴァキは宿ると考えられている。Vilkuna(1992)によれば、人々がヴァキにメッセージを伝える最も単純で効果的な方法が針葉樹、特にモミの木の枝を切り落とすことであった。この用に当てるため、カルシッコには主にモミが選ばれ、枝が切り落とされた。後の習慣で樹木に死者の名前と誕生年、死亡年、十字架を刻むか、それらの印が刻まれたボードを樹木に釘で打つという形式になった (Vuorela 1979:144)。

3-2. 死者のカルシッコの起源

死者のカルシッコについての起源は未だ明らかにされていない。フィンランド語の辞書において、枝が数本切り落とされた樹木を指す語彙としてカルシッコという語が取り上げられるのは、最も古いもので 1745 年のもの²である。特に死者のカルシッコをあらわす語彙を辞書で確認できるのは、最も古いもので、1786 年のもの³である。Vilkuna (1992, 1993) は宗教改革と 15 世紀の終わりから始まった焼き畑開拓によるサボ人⁴の移動とを照らし合わせ、16 世紀の終わりから 17 世紀を、その起源として定めている。この風習は主に東フィンランドのサボ地方と北カレリア地方の西部に住むルーテル派教会に属している人々の間で行われてきた (図 1 参照)。15 世紀の終わりから、サボ地方に住むフィンランド人は定住地を西、北西、そして北へ広げている。加えて 17 世紀の初めには、スウェーデン王に促され、サボのフィンランド人は、中央スウェーデンの森林地帯に定住した。この人々は通称、森のフィンランド人 (Metsäsuomalaiset) と呼ばれている。ただし、サボのフィンランド人が移住した場所では、必ずしも死者のカルシッコの風習を確認できるわけではない。森のフィンランド人の地域でも同様である。フィンランド西部のルーテル派教会の人々が暮らす地域と、フィンランド東部でもギリシア正教会に属する人々が暮らす地域では死者のカルシッコの風習は確認されていない。これを理由として Vilkuna (1992, 1993) は、サボ地方のフィンランド人が各地に定住した後である 16 世紀の終わりから 17 世紀頃に、祖



図1 (Vilkuna1992:40)より抜粋。フィンランドの死者のカルシッコと十字架の木の分布図。黒丸は死者のカルシッコと十字架の木の風習が行われてきたという情報が2つ、またはいくつかあることを示し、白丸はそれらの情報が1つだけであることを示している。十字架の木は図における南東、現在ロシア領となっているラドガ湖の横に突き出た地域を中心に分布している。

が生じた (Vilkuna 1993:149)。Vilkuna (1992,1993) の推測では、死者は死後、死者のコミュニティに行かず、最後の審判の際に起き上がるまで墓場で待機している状態にあるというキリスト教の教えから、人々は死者が歩き回ると考え、死者のカルシッコを作ったとしている。しかし、ローマ・カトリック教会とルーテル派教会は死者が墓場から動き回るといふ人々の考えは支持しなかった。教会は死者が動き回るといふ人々の考えの誤りを非難せず、時には奨励もしたが (Vilkuna 1993:144)、教会は故意にこの風習を支持していたわけではないと考えられる。

死者のカルシッコは、それ自身が生者の領域と死者の領域を分ける境界だとされ、家と墓場を結ぶ道の途中に作られた。死者が家に帰ろうとしたとき、死者は道の途中で自分のカルシッコを見て、自身が既に死んでいることに気づき、墓に帰るとされた。死者のカルシッコは死者を生者のコミュニティから切り離すことで、死による社会の不秩序を整え、生きている人々の生活を死者による妨害から守る存在であった (Vilkuna 1993:144)。死者が生者のコミュニティに帰ってこず、墓場に留まることを確実にするためには生と死を分ける境界を作り、望まれない死者の帰還に対して用心する必要があった (Vilkuna 1993:149)。

先崇拜に代表される土着の信仰の影響を受けた宗教改革の波の中で死者のカルシッコの風習が整えられていったとしている。また、19世紀以降の習慣で、死者のカルシッコは樹木のみに限られなくなった。サボ地方とカレリア地方、またその西部において、死者のイニシャルや十字架、埋葬年などが、石に刻まれたり、それらの印が刻まれたボードが穀物庫の壁に取り付けられたりした。これらもまた、カルシッコと呼ばれている。石のカルシッコに関する記述は最も古いもので 1852年のものであり、Vilkuna は樹木以外に作られる石やボードのカルシッコを「カルシッコの第二波 (Vilkuna 1993:143)」と呼んでいる。

第2章で前述した通り、フィンランドにローマ・カトリック教会とルーテル派教会が入ってきたとき、死者は死後、死者のコミュニティに行くという民間信仰の観念は否定され、墓場に留まり、最後の審判を待つという教えが広められた。ローマ・カトリック教会とルーテル派教会は、死者をヒーシと呼ばれる聖なる茂みなどに埋葬するのではなく、より遠く離れた教会の墓地に埋めるように命じたため、キリスト教の教えと、それ以前に考えられていた死者に関する信仰の観念に矛盾

3-3. 死者のカルシッコの変遷

死者のカルシッコは、その形式に加え、機能の面でも、これまでに変化が起こっている。形式の変化として、樹木の枝を切りとることから樹木や石に印を刻むという制作方法の変化については前述した。加えて、Vilkuna (1992, 1993) は死者のカルシッコの機能の変化として、死者を墓場に帰すというよりも、近年は死者を思い出すものとして働いていることを示している。

これらの変化以前にも、家族の誰に対してカルシッコを作るかという点とカルシッコの規模の縮小という点で変化が生じているとされている。民俗学者の Kaarle Krohn によると、ある家族が新しい土地に移住すると、最初になすべきことは、家の近くの適切などころに木立を残して、そこに死者のカルシッコの場所を定めることであった。その木立には農場の近くや道の傍らなどが選ばれ、死者のカルシッコの木にはモミの木が選ばれることが多かった。ひとたびカルシッコの木が決まり、死者の印が刻まれたなら、名前の記された死者に対して、季節ごとに初物を木立に持って行って捧げ物とした。春には最初に獲った魚を料理し捧げ物とし、牛を屠殺したならその肉で最初に作った料理を捧げ物とした。お金も使用する前に一度この木立で捧げ物とされることもあった (Krohn 1898:66)。死者のカルシッコははじめ、農場に住む使用人や子供たち、すべての家族のために作られていたが、後に家の主人と女主人のためだけに作られるようになったとされている (Krohn 1898:65-66)。また、捧げものをしてきたカルシッコの木立は、時代が下るにつれて一本の木のみに減らされた (Krohn 1898:66)。死者のカルシッコの風習は、その歴史の中で多くの変化を経験してきたと言える。現在のフィンランドではこの風習を知っている人は少なく、Vilkuna (1992, 1993) は終わった風習、または終わりつつある風習として記している。19世紀半ばの産業の発展、地方の人口変化、土地の再配分といった近代化の波がそれらの理由として挙げられている。近代化の波の中で、死者のカルシッコの機能も変わり、風習自体も衰退しつつある。

これまでの死者のカルシッコの研究では、主に風習の起源、機能と分布、風習の変化に注目が集まってきた (Krohn 1898 ; Vilkuna 1992, 1993 ; Sarmela 2009)。近年、フィンランドにおける樹木と人間の内面的な繋がりに注目したものとして、写真家のリトヴァ・コヴァライネンとサンニ・セッポの共著“PUIDEN KANSA” (1997) が挙げられる。“PUIDEN KANSA”の直訳は「木の人々」という意味だが、この本の日本語版タイトルでは『フィンランド・森の精霊と旅をする』(2009)となっている。彼らは写真を撮ると同時に、樹木と関係を結んでいる人々の話を聞き、それを本にまとめた。この本には死者のカルシッコを受け継いできた、ある一家族のエピソードが紹介されている (Kovalainen, Seppo 1997:100)。この本が、これまでの死者のカルシッコの研究の中で人々の生の声が聞けるものである。しかし、この終わりつつある風習を前に、人々がその変化をどのように受け止めているのかという部分は言及されてこなかった。その理由として、カルシッコの風習が人々の生活や社会の流れの中で捉えられてこなかったことが挙げられる。カルシッコの風習と人々の生活は切り離されて考えられてきた。次章では死者のカルシッコを通して、人々が何を感じ、樹木とどのような関係を結んできたか、そして風習の終わりをどのように受け止めていくかといった人々の想いの一事例を、フィールドワークでの情報をもとに記述する。

4. カルシッコとある家族

今回のフィールドワークは 18 世紀後半から、現在と同じ土地で先祖代々、死者のカルシッコの木を受け継いできたご夫婦のもとでおこなった。本稿は 2018 年 8 月 27 日から 9 月 1 日、2019 年 11 月 1 日から 11 月 6 日、2019 年 12 月 21 日から 2020 年 1 月 5 日のフィールドワークで得た情報を紹介する。本稿で記述する人々の発言は、本人の了承を得て記載している。

家族が住む街は北カレリア地方のユーカ（Juuka）という地域である。ユーカはフィンランド北カレリア地方のピエリネン湖の西岸に面している。中心部はユーカの教会村（Juan kirkkorylä）と呼ばれており、家族が住んでいる場所も中心部に属している。ユーカの教会村にはルーテル派教会と正教会のチャペルがある。今回フィールドワークをさせていただいた家族はルーテル派教会に所属している。ユーカの教会村に加えて、その他 20 の小さな村でユーカは構成されている。ユーカの中心部には、19 世紀から 20 世紀の中心街の街並みを残した地区があり、木のユーカ（Puu Juuka）と呼ばれている。この地区は妻が子どもだったとき、ユーカのすべての村の中心部だったとのことである。フィールドワークを行った家族が住む敷地内にも、200 年ほど前の家畜小屋が今なお立っており、さながら野外博物館のようである。もともとは妻の家系が農場を営みながら代々住んできた土地で、今は夫と妻だけで住んでいる。今では家畜もおらず、農場を営んではないが、広い敷地といくつもの木造の古い小屋から以前の暮らしが垣間見える（写真 1 参照）。



写真 1：農場の面影を残す小屋や井戸（左）



写真 2：まっすぐに伸びる新しい道とほぼ使われなくなった左に曲がる道（右）

そこから少し外れた森の、今ではほとんど使われていない小道の傍らに、彼らのカルシッコの木がある（写真 2～5 参照）。樹木には、1771 年からその土地で農業を営んできた妻の家系の主人、または女主人の印が刻まれている。樹木に直に削った部分とボードを取り付けた部分があり、直に削られている方が年代の古いものである（写真 6 参照）。その土地に住んできた家族の印が詰まった大切な樹木である。しかし、彼らのカルシッコの木は既に樹木の最上部が落ち、木の皮も剥がれ落ちていく（写真 7 参照）。樹木にはキツツキが突いた跡なのか、無数の穴が開いており、周りの木々とは色や雰囲気から明らかに浮いていた。荘厳で誇り高い木に見える一方で痛々しくもあった。本当に、いつ倒れてもおかしくない状況を目の当たりにした。夫にカルシッコの木を紹介してもらい家に帰って来た筆者に妻が言った「悲しい木なの」という言葉は、まさにあのカルシッコの様子を示していた。

もともとカルシッコの木に杭で打たれていたボードはいくつかはがれているが（写真8参照）、新しく作り直したりはせずに、落ちたものをそのまま木に立てかけてある。今では車が通れる新しい道が出来たために、ご夫婦もカルシッコの木が佇む古い道は通らないし、意図的にカルシッコの木を見に行くことはしない。「昔の人々にとってカルシッコの木は重要なものだっただろう。今この風習は続いていて、敬意は払っているけれど、あまり意味はない。わざわざ見に行くことはない。」という。まさに、彼らの風習は衰退しているように見えた。車、都市部へ通じる新しい道、職業の変化、彼らの生活にももれなく近代化の波は押し寄せ、カルシッコの木と家族のつながりは薄れているようだった。しかし、だからといって彼らがカルシッコの木のことを完全に忘れてしまっているわけではない。家族は時代の変化を受け入れながらも、カルシッコの木のテリトリーをどことなく認め、敬意を抱き、それぞれのやり方で樹木と繋がっていることがフィールドワークを通してわかった。



写真3：カルシッコの木への道を案内してくれる夫（左）



写真4：カルシッコの木に通じる昔の道（右）



写真5：周りの木々の中で存在感を放つカルシッコの木（左）



写真6：カルシッコの樹木（右）



写真7：落ちた最上部の枝（左）



写真8：剥がれたボード（右）

妻は彼女の小さい頃の話を持ち出して、カルシッコの木について話してくれた。「昔は町に繋がるのはカルシッコの木が立っている古い道しかなかったから、小さいころは毎日カルシッコの木の傍を歩いて学校に通っていた。」小さい頃の彼女はカルシッコの木がどのようなものか知っていたので、「カルシッコの木は大切だけど、少し怖い存在だった」そうだ。でも今はカルシッコの木を見ても怖いという感情はなく、「あの木は私たち家族のルーツのひとつなの。」と尊敬の気持ちを抱いていることを教えてくれた。

また一方、妻と結婚してからユーカに住み始めた夫にとって、カルシッコの伝統は新しいものだった。彼がやってきたのは40年前で、まだ妻の母が生きていたときだった。力仕事や建物を建てるのは夫の仕事で、カルシッコの木から20メートルの距離に水道管を作り、小屋を建てた(写真9参照)。夫自身はカルシッコの木を乱したくなかったというが、妻は、作った小屋がカルシッコの木から近すぎるのではないかと思ったという。また、小屋が近すぎたためにカルシッコの木が諦めて、枯れようと思ったのではないかと考え、小屋の建設をここ20年程でカルシッコの木が枯れた原因として挙げた。これらのことからわかることは、カルシッコの木は彼らの日常に溶け込んでいるけれど、やはり特別なもので、それ自身のテリトリーを人々が認めているようだという事である。彼らのカルシッコの木は既に枯れていて、最上部の枝は落ちたそのままになっている。夫の「この落ちた枝も本当は取り除いた方がいいんだろうけど、このままにしておくんだ。」という発言や剥がれて地面に落ちたボードも、無理に付けたりせずに、幹に立てかけたりしている様子から、カルシッコの木の領域を乱さないようにしていることが窺えた。加えて、彼らはカルシッコの木に触れたり、抱きしめたりはしない。カルシッコと家族の記念写真を撮ったとき、両者には一定の距離があった。それについて尋ねると、「触れるには勇気がいるね。」とのことだった。このような距離感や、カルシッコから落ちた枝やボードもカルシッコの木に属しているから取り除かないということから、彼らにとってのカルシッコの木はまだどこか恐れに近い感情を抱かせるものようであった。



写真9：右の小屋がカルシッコの木に近かったのではないかと saying いたもの。距離は約20m。

妻の二人の姉にもカルシッコの木にまつわるお話しを聞くことが出来た。一番上の姉はカルシッコの木の下でよく立ち止まって、亡くなった祖父や父、母のことを思いだしていることを話してくれた。特に祖父に関する記憶は印象的だった。カルシッコの木から少し離れたところに人が一人腰かけられるほどの石がある。まだ小さかった一番上の姉の記憶に残る祖父の姿は、その石に腰かけている姿である。祖父は目がよく見えなかったそうだが、それでもカルシッコの木の近くにある石にいつも腰かけていたのだという。「そこからなら家族が農場で働いている様子もわかるし、カルシッコの木も近かったから、いい場所だったんじゃないかしら。」今では彼女がその石からカルシッコの木を眺めるのだと言う。今の自分と祖父の姿を重ねているのである。また、木に刻まれた一番古い年代である 1777 年の印を見て、この当時の人々がどうだったかを想像していると話してくれた。

二番目の姉は時折カルシッコの木に花のデコレーションを持っていく。それは特につながりがあった両親に対してであるという。彼女は妻と違って、小さい頃カルシッコを怖いと感じたことはなかったようだが、聖なる場所という意識はあったということだった。今はカルシッコの木を見て両親のことを思いだし、樹木の下で写真を撮ったことなどを思い出しているという。加えて、カルシッコはみんなの人生を示すもののようにだとも考えていた。

このように、カルシッコの木をとりまく家族がどのような想いでカルシッコの木を眺めているかということ調査してわかったことは、ひとつの家族とはいえ、それぞれのカルシッコの木との繋がり方があるということだ。彼らは歳が違うし、見てきたこと、持っている記憶や思い出も違う。それぞれのやり方でカルシッコの木と繋がっていることがわかった。

上記のことから、彼らが考えているカルシッコの木は死者を思い出すものであることがわかる。先行研究の中で *Vilkuna* (1992, 1993) もこの変化については既に言及しているが、今回のフィールドワークで得た具体的な例をここで述べたい。伝承では、カルシッコには死者を墓に帰らせる機能があると言われている。フィンランドの人々にとって死者と死者がもつ力は恐れの対象であり、死者が家に帰ってくるのを防ぐために墓場と家を結ぶ道の途中にカルシッコの木を作ったのであった。そこでご夫婦に、もし妻の母の霊が家に帰ってきたらどう思うか尋ねてみた。妻の母は 1992 年に亡くなっており、彼女の印が刻まれたボードは彼らのカルシッコの木が一番上に取り付けられている。「彼女はとてもやさしい人だったから、もし今帰ってきてても、怖くないし、敬意を払いたい。」という返事が夫から返ってきた。確かに、彼らのカルシッコの木は道の途中にあることから、かつては霊を帰らせるためのものだと考えられていたはずである。しかし、現代に生きる彼らの考え方は変わっており、カルシッコの木は死者への恐れから死者を帰らせるというよりも、より死者を思い出すものとして働いている。そこには死者の霊に対する考え方の変化も窺える。

また、彼らがかつてのカルシッコの木の機能が死者を防ぐためのものではなかったと考えているようでもあった。「昔の人たちは農業で忙しくて、車もなかったから、なかなかお墓に行くことはなかっただろう。だからカルシッコの木はお墓代わりだったのかもしれないね。」確かに、かつてのカルシッコの木の機能にも人々を思い出すためのものという要素はあっただろう。それが近年、その要素をより強めていることができる。時代は変わり、お墓には車で行けるし、今では写真やビデオがある。それらは死者の面影をリ

アルに残しておけるメディアである。このような時代の変化の中で、カルシッコの木が担う要素も変わり、風習を続ける意味を少しずつ失ってきたのだろう。

加えて、現代のカルシッコの木は人々に死者を思い出させるとともに、時空の旅をさせている。人々は自分が生きていない時代の印が刻まれているのを見て、その時代ここに住んでいた人、今自分がいる場所と同じ場所にいた人々がどのように過ごしていたかをイメージしている。そして自分が生きてきた時代の印を見て、自分の記憶にある人々のことや彼らと過ごした時間を思い出している。また、それと同時に人々は現代との比較もしている。カルシッコの木について話す際、彼らが若いころの話や時代の変化の話、そして人生の話にいつも話題が移っていった。妻と夫の出身地は違うけれど、それぞれ農家の娘と息子だった。どちらも小さい頃は農家の手伝いをしていたそうだ。夫は「学校の夏休みは3ヶ月くらいだったけど、毎日農場の手伝いをしていた。忙しかったし、子供にとっては大変な仕事だった。」「昔はテレビもとても珍しかったけど、時代がくだっていくごとに、カラーテレビやコンピューター、携帯が出てきた。昔はヘルシンキに行くことさえ想像がつかなかったけれど、今では海外にだっていける、そしてこうやって日本人が調査に来る時代になった。」「自分が車を持つなんて信じられなかったけど、今では2つも持ってる。」というように、いかに昔と今が変わったかという話をカルシッコについて話す中のであった。妻もまたカルシッコの木を見て、どんなに昔と今が違うかを感じると話してくれた。

以上のことから、現代のカルシッコの木はこれまで言及されてきたような、単に死者を思い出すものとして機能するだけではなく、昔をイメージさせる/思い出させると同時に現代との比較を促すものであるということが言える。実際にカルシッコの木と生きてきた人々にとって、カルシッコは個人の死者を思い出させるだけではなく、その周りの風景や人々の暮らしをイメージさせ、現代と比較する、いわば時空の物差しのような役割をも果たすのである。

5. 樹木とともに生きる

フィールドワークでは死について考えさせられることが多かった。それは人間の死であるだけでなく、樹木の死、そして風習の死、すなわち風習の終わりについてである。前述したように彼らのカルシッコの木は立ち枯れている。カルシッコの木が倒れることについて、妻はこのように述べた。「永遠はない。木は人間のようなね。歳を取って死んでいく。人間がいつか倒れるように、木もいつかは倒れる。木も人間も野菜も鳥も同じように生まれて死ぬ。それが「いのち (elämä)」だから。」夫や妻の姉たちも同じように、カルシッコが倒れることは自然なこととして見ていた。カルシッコの木も生まれて死ぬ「いのち」という点で決して例外ではないのである。夫がカルシッコの木の死について述べた言葉は印象的だった。「今カルシッコの木が立っているあの場所がカルシッコの場所なんだ。自分たちはヘルシンキに移り住もうとは思わない。ここが自分たちの場所で、根っこだから、ここで死ぬ。カルシッコの木もあそこで生まれてあそこで死ぬんだ。」彼らとカルシッコの「いのち」は共に等しく、それぞれの場所で生まれて、それぞれの場所で死んでいく。生きるということは死を含むことであるということを確認、それが自然なことであるとしているのであった。

またそれは、カルシッコの木が倒れるときが彼らの風習の終わりであることも示している。20年前はカルシッコの樹木の状態もよく、夫と妻は自分たちが死んだときには家族の誰かが自分たちの印を刻んでくれるだろうと思っていたと言う。しかし、今やカルシッコの樹木の状態は非常に悪い。自分たちの印が刻まれたボードを取り付けてもらいたいと考えてはいるが、取り付けられるかわからないのが現状である。しかし、彼らは新しいカルシッコの木を作ろうとは考えていない。夫と妻にはカルシッコの木他に、お気に入りのトウヒの木がある。それは2つのトウヒの木で、家から湖のコテージへ向かう小さな道の傍らに立っている（写真 10 参照）。夫は「自分と妻の2人が立ってるみたいだろう。」と言ってその2つのトウヒの木を紹介してくれた。道の手前に立っている木の方が少し大きいので、妻は手前が夫の木で奥に立つ木が自分の木だとしている。ご夫婦は何か自然に自分たちの印を残したいと考えてはいるが、そのトウヒの木を新しいカルシッコにしようなどとは考えていない。立ち枯れたカルシッコの木に釘打たれている死者の印が刻まれたボードを取り外して、別の木に取り付けるような行為はばかばかしくて変だし、それは「真」の伝統ではないと考えている。その代わりに彼らは、人々との付き合いの中に自分たちの印を思い出として刻んでいるのだと話してくれた。そしてそれは筆者にも刻まれているのである。ともに生きるということは、同時に死をも含んでいる。終わりに向かうカルシッコの風習を通して明らかになるのは、樹木と人間の等しい「いのち」である。今回のフィールドでお会いした家族は、「いのち」あるものの全てが迎える死と伝統の終わりを自然なことだとしているのであった。

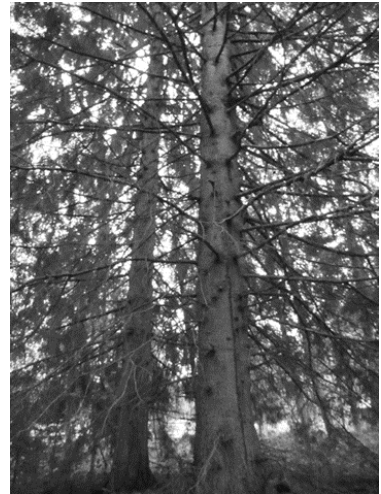


写真 10：夫と妻のトウヒの木

フィールドでお会いした家族にとっての樹木はカルシッコの木やお気に入りのトウヒの木だけではない。樹木は木材として、生活していく上でなくてはならないものである。彼らは合計で 100 ヘクタールの土地を所有しているが、そのほとんどは木々で覆われており、手が増えられていない部分が多い。その理由として妻はこのように述べた。「ウサギやリス、鳥が巣をつくるためにそのままにしている。私たちにはもう、そんなに必要ではないからね。」また夫も、一部トラクターを入れない森を残していて、その場所を自分の自然公園と呼んでいる。その場所を通るときはいつもその森を見ているのだという。彼らの森の一部は林業の業者に託しているが、一部は自分たちの薪用に夫が自分で木を伐り、薪を割っている。薪用の木々は秋に伐り、冬は伐ったものを庭に置いておく（写真 11 参照）。春になって薪を割る。割った薪は春から夏によく乾くとのことで、2 年ほど倉庫に置いて乾かしたものを使っている（写真 12 参照）。薪は台所の石の暖炉を暖めるのと、家全体に備え付けられた暖房器の中を通る熱湯を作る暖炉のために使われている。台所の石の暖炉はオープンとしても使われている。冬は毎日この2つの暖炉に薪がくべられている。夏でも石の暖炉は冷たいため、週に 1 回は薪をくべるのだと言う。「私たちは木を使って生きているんだ。林業はフィンランドの経済を支えてきたものだし、林業がないと今のフィンランドはない。カルシッコの木だけじゃなくて、自分たちにはいろんな木との繋がり方がある。」と

夫が言うように、樹木は彼らの生活の上でなくてはならない存在であることがわかる。



写真 11：森から伐りだし、庭に置かれた樹木（左）



写真 12：薪を蓄えておく倉庫（右）

ある日、筆者が夫と森を歩いているときに、森を紹介してくれたことがあった。「ここは若い森で、ここは苗木が植えられたばかりの森。人間と同じだね。この若い森はあなたの森で、この苗木の森は子供たちの森。この古い森は自分たちの森なんだ。」樹木について話すとき、夫も妻も人間の話をする。人間と樹木は同じような存在であると捉えているようだ。それはカルシッコの木やお気に入りのトウヒの木についての話に限られておらず、森で見かける木々にも当てはめられている。人間は樹木を使用して生きてきた。その一方で樹木や森を保護し、特定の木々と関係を結んできた。フィールド先の家族にとって樹木と人間はどのように結びついているのだろうか。次章では人類学の議論を用いて、フィールドにおける樹木と人間の関係の在り方を分析する。

6. 人類学の存在論的転回との繋がり

カルシッコの木はフィールドワーク先の家族にとって、死者を思い出させるだけではなく、その周りの風景や人々の暮らしをイメージさせ、現代と比較する、時空の物差しのような役割をもつことを第4章で述べた。また第5章では、彼らが樹木と人間の「いのち」の生と死を等しく見ており、樹木と人間は同じような存在として捉えられていることについて触れた。これらの事例を近年の人類学の存在論的転回と「自然と文化」の二元論の問い直しに照らし合わせて分析していきたい。

人々がカルシッコの木によって死者を思い出したり、昔をイメージし、それらを現代の生活と比較したりするということは、カルシッコの木が家族の思考に働きかけているということである。また、人々がカルシッコの木のテリトリーを気にし、近くに建物を建てたためにカルシッコの木は枯れようと決めたのではないかという考えは、カルシッコの木の主体性を認めているということが言える。このことは、人間は自然に働きかける主体であり、自然は人間に働きかけられる客体であるとする西洋近代の枠組みとは異なるものである。

西洋近代に特徴的な前提であった「自然と文化」の二元論は、産業資本主義や工業のグローバル化、科学技術の発展の基盤にあるものであった。18世紀以降、産業が発展していく一方で各地の森林は伐採され、産業廃棄物による環境汚染や地球温暖化が引き起こす問

題が地球をむしばんでいった。フィンランド東部は18世紀まで、木タールに加え、焼き畑で作った牧草地で育てた牛から作ったバターを主産物としていた(Alapuro 1988:69)。しかし、19世紀の半ばの時点では林業の急速な発展で、製材産業がフィンランド東部の唯一の産業となり、1850年代にはフィンランドの製材製品の3分の2を占めていたとされる(Alapuro 1988:66)。当時の製材産業の中心地はヴィープリ(現在はロシア領)で、ヴィープリの製材会社はフィンランド東部の土地を購入した。そのため、東地域はヴィープリへ木材を運送するための土地となり、農民は製材の伐採か運搬、または製材工場で賃金労働をしていたとされている(Alapuro 1988:69)。産業の発展に伴う形で、自然と人間の精神的なつながりも途切れつつあった。フィンランドにおいて、人々は家族の、または個人の樹木というように、様々な形で樹木との関係を結んでいた。コヴァライネンとセッポは“PUIDEN KANSA”において、科学が発展する中で、このような樹木との結びつきは稚拙なものだと感じ、樹木とのつながりを公にしない人もいたとしている。あとがきには、彼女たちのプロジェクトで会ったある老夫婦についての記述がある。二人はそれぞれに自分自身の樹木を持っていた。何かがあるとその木のもとに行き、自分の夢を語ったり、悲しみを告白したりする木である。しかし二人はお互いにそのことを語り合うことはなく、彼女たちが調査に行き、木との関係について尋ねたときに初めて、相手にも個人的に深い関係を結んでいる木があることを知ったという。(コヴァライネン、セッポ 2009:118)。近代の波は物理的側面や存在認識の面に加え、精神的側面においても「自然と人間」を二分し、両者を遠ざけていったことが窺える。

このような分断を乗り越えるべく、近年の人類学研究において謳われているものが存在論的転回、人類学の静かな革命とも呼ばれる「自然と文化」の分断を問い直す試みである。1980年、90年代は人類学の客観主義や記述の問題点を主題化したポストモダンの時代であり、再帰人類学の時代であった。その流れの中で人類学が自明のものとしてきた「自然と文化」の二元論を見直す動きがでてくる。自然もまた、人間に働きかける主体として考えられ始めたのである。インタビューで得た人々の回答からは、カルシッコの木が主体性を持ち、人々の行動や思考に影響を与えていることが窺えた。

また、ご夫婦が樹木と人間を同じような存在として捉えていることは、「自然と文化」を巡る議論の中で、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロが唱えた多自然主義と繋がるように思われる。彼は「アメリカ先住民の概念は、精神の単一性と身体の高多様性を想定している。「文化」もしくは主体が、普遍性の形式をえがき、「自然」あるいは客体が、個別の形式をえがく(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015:44)」と述べ、これを近代的な多文化主義の考えとは対をなす「多自然主義」と呼んだ。それまでの近代的な認識では、客体的で普遍的なものとして唯一の自然を捉えていた。また、ひとつの世界における人間の社会や文化、精神はそれぞれに主体的で特殊であるとされ、多文化主義が掲げられた。その反転として、ヴィヴェイロス・デ・カストロは人間と非人間がそれぞれに主体となって世界を見んとするパースペクティヴィズムを唱え、多自然主義を掲げたのであった。しかし、ヴィヴェイロス・デ・カストロの多自然主義や、人間と非人間を同格に扱うことを前提とする研究では、植物よりも、主に動物が、その対象として捉えられてきた。植物は特に農村研究において研究者の関心を集めてきたが、存在論的転回以降の「自然と文化」を巡る人類学的研究では、人間と同格の存在として研究されることは少なかった。死者の

カルシッコを通して樹木と人間の繋がりを明らかにすることは、存在論的転回以降の「自然と文化」を巡る人類学的研究の視野を広げるものになると思われる。フィールドにおいて、樹木と人間は同じように生まれて、人生の過程を歩み、死んでいくことが言われていた。フィールド先の家族が樹木の人格性を認めているかという部分と樹木がどのように世界をまなざしているかという部分は今回のフィールドワークでは明らかでないため、パースペクティヴィズムとの結びつきは避けるが、カルシッコの木やトウヒの木、森に生えている木々について話す際に自分たちについて話すことは、彼らの中で樹木が人間と同じような存在として捉えられていることではないだろうか。フィールドワークで得た情報は、人間も樹木もそれぞれに主体性を持ち、精神の単一性を唱えた多自然主義と繋がるという点で、存在論的転回以降の「自然と文化」を巡る人類学的議論の流れの中に位置づけることができるだろう。

7. まとめ

本稿では、フィンランドにおける宗教的世界観の推移とカルシッコと死者のカルシッコについての歴史的背景を説明した後に、死者のカルシッコの樹木を持つ家族のもとでのフィールドワークで得た資料を紹介した。人々がカルシッコの木を見て死者や昔を思い出し/イメージし、現代との比較をしているという点において、樹木が人々の行動や思考に主体的に働きかけてくることを指摘した。また、樹木と人間が同じ存在のように語られることについて、ヴィヴェイロス・デ・カストロの多自然主義との繋がりを述べ、本研究が「自然と文化」を巡る存在論的転回以降の人類学の議論に位置づけられることを示した。

今後はこうした「自然と文化」の二分法を問い直す近年の人類学の動向と自身のフィールドワークからの情報とを対話させ、新たな理論枠組みを生み出していくことを目指したい。引き続きフィールドワークを重ね、死者のカルシッコの文化と、その基盤にある人々の生活に視野を広げていきたい。また、近代化による農業から林業への移行の過程において、人々の生活に実質的にどのような変化が起こったかという部分にも注目する必要がある。その変化を背景に、現在の生活の中で林業がどのように行われているかを参与観察しながら、カルシッコの木との結びつきを考察することで、人間と樹木の繋がりをより深く理解していきたい。

謝辞

2018年のフィールドワークは2018年度スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団による「フィンランドの樹木風習にみる樹木と人間の共存に関する研究」の助成金交付を受け、遂行することが出来ました。感謝申し上げます。

注

- 1 死者のカルシッコの樹木と類似するものとして、十字架の木（Ristipuu）というものがある。十字架の木には死者のために十字架の印が刻まれる。十字架の木は死者のカルシッコの風習と同じ時期にフィンランド東南部やバルト地域で作られ、エストニアの一部の地域では今でも続けられている風習である。しかし、今回のフィールドワーク先の家族の樹木は十字架の木ではなく死者のカルシッコの木であり、家族もカルシッコの木と呼んでいるため、本稿では死者のカルシッコのみの説明に留める。また、本文において死者のカルシッコをそれ以外の目的で作られるカルシッコと明確に分ける際には「死者のカルシッコ」と記す。しかし、今日フィンランドにおいてカルシッコという死者のカルシッコを指すことがほとんどであり、フィールド先の人々もカルシッコと呼んでいる

ため、フィールドワークでの情報を記す際とそれらの情報を分析する際には、主にカルシッコまたはカルシッコの木と記す。

- 2 1745年に出版された Daniel Juslenius の辞書、“Suomalaisen Sana-lugun Coetus” にカルシッコの記述がある。
- 3 1786年に出版された Christfried Ganander の辞書、“Nytt Finskt Lexikon” に死者のカルシッコの記述がある。
- 4 サボ人はもともとサイマー湖に面した地域の内陸部を定住地としていた (Krohn 1898:64)。15世紀から焼き畑によって開拓地を各地に広げていった。

参考文献

Alapuro, Risto

1988 *State and Revolution in Finland*. University of California Press, Berkeley.

Kovalainen, Ritva and Seppo, Sanni

1997 PUIDEN KANSA. Pohjoinen, Oulu. (コヴァライネン、リトヴァ、セッポ、サンニ 2009 柴田 昌平 (訳) 『フィンランド・森の精霊と旅をする』プロダクション・エイシア、東京.)

Krohn, Kaarle

1898 A kind of worship of the dead in Finland. *The International Folk-Lore Congress of the World's Columbian Exposition* 1:64-69.

Sarmela, Matti

2009 FINNISH FOLKLORE ATLAS Ethnic Culture of Finland 2. Helsinki.

Vilkuna, Janne

1992 Suomalaiset vainajien karsikot ja ristipuut. *Kansatieteellinen arkisto* 39, Suomen muinaismuistoyhdistys, Helsinki.

1993 The karsikko and cross tree tradition of Finland: the origins, change and end of the custom. *Ethnologia Europaea* 23(2):135-152.

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド

2015 檜垣立哉、山崎吾郎 (訳) 『食人の形而上学 ポスト構造主義的人類学への道』洛北出版、京都.

2016 近藤宏 (訳) 「アメリカ大陸先住民のパーспекティヴィズムと多自然主義」『現代思想』44(5):41-79.

Vuorela, Toivo

1979 *Kansanperinteen sanakirja*. Werner Söderström Osakeyhtiö, Porvoo.

(たなか・ゆみ／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)